

革新的サービス
一般型
設備投資

大量集客が可能なスポーツ合宿 対応型ホテルの本格的な事業展開 株式会社ますの井



合宿誘致専用のパンフレットも制作



周辺スポーツ施設では合宿練習が盛ん



楽しい夕食会場になった宴会場

子どもたちを河川プールへ案内



スポーツ合宿の到着で賑わう駐車場

大活躍の無料大型ランドリーと製氷機

01 企業情報 profile

会社名 株式会社ますの井
代表者 代表取締役 角田 英之
所在地 〒879-7131 大分県豊後大野市三重町市場95番地
TEL.0974-22-1050 FAX.0974-22-1335
URL <http://www.masunoi.com>
E-Mail sumida@po.d-b.ne.jp (担当 角田 英之)
事業内容 ホテル業
資本金 310万円
創業 昭和33年
設立 平成22年5月13日
社員数 40名

02 概要 outline

スポーツ施設が多い立地メリットを活かした新事業として、主に学生を対象にした大量集客が可能なスポーツ合宿対応型ホテルへ転換するため、合宿に必要な各種設備を導入する。

03 背景・経緯 background

「スポーツ」という地域特性に着目し 思いきった業態転換を決断

「おんせん県おおいた」を商標登録し、国内外へ温泉観光の一大メッカとして情報発信している大分県。しかし既存の温泉施設がない豊後大野市と津久見市では、温泉とは一線を画した観光資源を提案する観光関係者も多い。

豊後大野市三重町の老舗宿・ますの井は、旧来の地方旅館のスタイルを一新し、従来のビジネスならびに宴会での利用に加えて、スポーツ合宿に特化した宿への業態転換を実施した。

豊後大野観光といえば原尻の滝や稲積水中鍾乳洞等が思い浮かぶが、いずれも日帰り観光客が主体。平成25年にジオパークとして認定されたものの、宿泊客誘致にまでは至っていない。市内には宿泊施設が6施設あるが、いずれもビジネスや工事関係の宿泊であり、宴会や結婚式利用も減少傾向にある。

そこで4代目となる角田英之・現社長が考えたのが、スポーツ合宿対応型ホテルである。豊後大野市といえば『サン・スポーツランドみえ』をはじめ、野球やサッカーのグラウンド、テニスコート、体育館、温水プールと各種スポーツ関連施設が集積している。県内には大分市、日出町、佐伯市でスポーツ合宿を積極的に受け入れている宿泊施設もあるが、大自然に囲まれスポーツに専念できるという点では、当地も遜色のない環境。老朽化の施設も、低価格設定であれば長期合宿の学生には十分魅力的である。

そのためには館内も徹底した合宿対応サービスが必要と考え、ものづくり補助金を活用して関連設備の充実に取り組んだ。

04 事業内容 details

利用者の立場になり 可能な限りのサービスを提供

いかなるスポーツ合宿にも対応できる設備を充実させるため、ますの井は「宿泊」「練習機材」「ミーティング機材」「雨天時対応」の4部門に分けて、スポーツ学生の満足度を高める設備を検討した。

まず館内には合宿時の洗濯用に大型ランドリーコーナーを設け、洗濯機・乾燥機を無料で使用可とした。大型製氷機や大型テント、スピーカーシステム、プロジェクターなど合宿時に必要となるであろう機器・道具も常備し、なんと野球部のためにバッ

ティング場やピッチングマシンも導入した。

食事はアスリートフードマイスターがスポーツ栄養学を取り入れた料理を提供し、宴会場は飲食物の持ち込み自由でオールナイトで使用可のコンパ会場へ。宿泊も人数に応じて和室をアレンジしたり、洋室はスタッキングベッドを導入してツインルームを4人部屋として使用するなど、既存設備をうまく活用した。さらにオフの日は周辺観光地を紹介するなど、スポーツツーリズムにも取り組んだ。

同社は今回の事業により、年間6,000泊のスポーツ合宿誘致を提供する体制を整えたという。

05 成果 achievement

利用者の口コミで評判が広がり 利益率も大幅アップ

スポーツ合宿の学生に向けた至れり尽くせりのサービスは評判を呼び、県外からの合宿受け入れも次第に増えていった。フェリー会社とタイアップして関西方面からのスポーツ部にとどまらず、韓国の学生野球部の長期合宿の誘致にも成功した。一度利用すると毎年のシーズンには大人数で再び申し込みが来るリピート率も高いという。

料金は平均で1泊3食6,500円と格安だが、引率者がいるため客室係によるサービスなど不要であり、利益率は高い。実際、受け入れ開始後の売上高は微増だが、営業利益は格段に増加している。

06 展望 future

インバウンド客に向けた情報発信と 周辺宿泊施設との共同事業も開始

劇的な業態転換を成功させた同社は、今後はインバウンド客誘致にも積極的に仕掛けるという。

さらに同地の旅館組合長でもある角田社長は、スポーツ大会誘致に伴う宿泊補助金を設け、加盟宿泊施設と力をあわせて宿泊客誘致に取り組んでいる。

豊後大野市のスポーツツーリズムに対する気運は、ますます輝きを放つ気配だ。

まとめ point

旧態依然とした地方の宿が、独自の視点で地域の特性を見直し、劇的な業態転換を成功させる。